

令和3年度 府中市立本宿小学校学校経営報告

令和4年3月31日

校長 藤咲 孝臣

(教育目標)

心身ともに健康で、知性と感性にとみ、自ら学ぶ実践力をもつ人間性豊かな児童「輝きのある子」の育成を目指す。

- 自分の考えをもち、やりぬく子供 → あきらめない心、折れない心を育む
自ら主体的に考え、課題意識をもち、問題を粘り強く解決していく能力や態度を育成する。
- 豊かな心をもち、仲良く助け合う子供 → 自他の理解と尊重する心を育む
人権を尊重し、公共の精神を尊び、お互いを認め励まし合う温かな心や他人を思いやる心を育成する。
- 健康安全に気を付け、体をきたえる子供 → 丈夫な体から丈夫な心を育む
自他の生命を尊重し、自ら健康を保ち、体力づくりに取り組む態度と実践力を育成する。

1 目指す学校像

創立51年を迎える本校の歴史と伝統を受け継ぎながら、ふるさと府中に誇りをもち、世界に活躍する府中っ子を育てる。保護者、地域の信頼に応え、教育目標である「輝きのある子」の育成を目指す。

(目指す学校)

- (1) 子供が第一の学校づくり → 子供たち一人一人を教職員全員で見守り、育てる。
 - ① 安心、安全な学校。
 - ② 心の温かい学校。
 - ③ 一人一人のよさや可能性を引き出す学校。
 - ④ たくましく自立を目指す学校。
 - ⑤ 自分の役割のある学校。

- (2) 教職員が、学び合い磨き合う学校づくり → 「チーム本宿」として教職員も輝く学校
 - ① 教職員が互いに協働する。(組織として 意図的計画的に)
 - ② 教職員が互いに磨き合う。(指導力向上へ自己研鑽 研究と修養に努める)

- (3) 保護者・地域と協力・連携する学校づくり → 責任と信頼を基に、学校・保護者・地域が連携して、共に子供を育てる「共育」の推進
 - ① 保護者・地域に広がる。
 - ② 保護者・地域から学ぶ。
 - ③ 保護者・地域と繋がる。

2 今年度の取り組みと自己評価

(1) 教育活動の目標と自己評価

① 児童の学力の定着、向上を図る。

- ・授業の内容や実施形態は一部制限が設けられたが、ねらいを明確にした指導計画を実践するとともに、実施時期や指導内容、指導形態を工夫し、授業の充実を図った。
- ・毎時間のねらいを明確にし、児童が達成感を味わえる「分かる授業・楽しい授業」を行った。特に、「本宿スタイル」として各教科で問題解決学習を推進し、主体的・対話的に学ぶ意欲や達成感を高めるために、授業観察での指導や校内研究・研修を通して教員の授業力向上に努めた。
- ・学習規律（授業規律、持ち物、ノート指導等）を指導した。また、話し方や聞き方の指導とともに手を挙げて、指名されたら「はい」と返事をし、立って答え、「です。」で終わる、「はい」「立つ」「です」の徹底の指導を全校で取り組んだ。
- ・外国語専科教員とALTや担任教師との連携を強化し、「外国語」「外国語活動」の授業を充実させ、児童は英語による表現に慣れ親しみ意欲的に居り組んだ。
- ・算数少人数指導、TT、学校支援員による個別指導を充実させ、児童一人一人のニーズや課題に対応した個別指導を実施した。
- ・GIGAスクール構想に基づきタブレット端末が児童全員に配備されたことにより、タブレット端末の日常的な活用を推進した。様々な教科でタブレット端末を活用することにより、児童がICT機器の活用に慣れ親しみ、スキルの向上とともに学習に広がりや深まりをもたせることができた。

② 教師の資質能力の向上を図る。

- ・校内研究で「児童の学びを深めるためのICT機器の活用」に取り組み、授業におけるタブレット端末の効果的な活用方法を全教員で研究し、研究授業を通して授業力の向上を目指した。また、情報担当教員やICT支援員が講師となり全教員参加型の研修を複数回実施し、教員のタブレット端末活用についてのスキルアップを図り、日常の実践に生かした。
- ・農業ボランティアの方を、年間を通してゲストティーチャーとして招聘し、栽培活動における児童の指導とともに交流を通して教員の地域連携についての意識向上を図った。
- ・自己申告を活用し、教師に今年度の目標を明確にもたせるとともに、校内研究の年間を通じた継続的な取り組みを実施した。
- ・学期1回以上1時間の授業観察を実施し、各教員に直接的に指導助言を行い、授業力の向上につなげた。また、経験の浅い教員を対象に、校長が日常的に短時間の授業観察を実施し、喫緊の課題解決につながるような指導助言を行い、授業改善につなげた。
- ・学年内で交換授業を実施して学年会で振り返りを行うことで、学年全体での児童理解を深めるとともに指導法の見直しを図り、指導力の向上につなげた。
- ・全教員が週の指導計画作成及び提出をおこない、教育課程の自己管理を実践するとともに、管理職が教育課程の適正な進行を定期的に確認することができた。
- ・体罰防止、個人情報管理について教員の意識向上を重点に、3回の服務事故防止研修を行った。また、月一回の職員会議でも、服務事故防止に関わる情報提供や指導を行い、

教員の意識向上を図り、サービス事故防止に努めた。

- ③ 感染症拡大予防に対応した児童の健康安全、いじめの未然防止、早期解決を図る。
- ・手指消毒、うがい、マスクの着用、身体的距離の確保等の、感染症拡大予防のための行動を、児童が理解し主体的に感染拡大予防の行動を取れるようになった。
 - ・感染症拡大予防のための、登校時の見守り、健康観察、授業形態の確認、消毒用消耗品の配布・補充等の対応を、生活指導部を中心に組織的に行った。
 - ・行事や学習活動など、市教委のガイドラインに沿って、できることをできる形で実施し児童に満足感や達成感などを味わわせ、児童の心身の健康維持に努めた。
 - ・児童の課題を共有し、全校で協力した指導を実施できた。日常的な児童観察、児童理解に努め、情報交換を密に行った。
 - ・年間3回の「いじめアンケート」を実施し、児童の実態把握に努め、未然防止、早期解決を図った。いじめ0にはならなかったが、発見されたいじめについて、組織的な対応、保護者や教育委員会と連携して対応を行い、再発防止に努めた。
 - ・いじめが発見されたら、すぐに「本宿小学校いじめ防止対策委員会」を開催し、組織的な対応策を検討、決定するとともに、児童、保護者への初期対応を行った。
 - ・毎学期、「いじめの授業」の取組を行った。
 - ・毎月一回の避難訓練を通して、火災や地震発生時の避難行動を繰り返し指導し、児童は自助・共助の意識をもち自覚して行動できるようになった。感染症予防のため、今年度も地域と連携した防災訓練が実施できなかった。
 - ・児童のアレルギー反応についての確実な情報提供を保護者とを行い、食物アレルギー対応を確実にを行った。
- ④ 不登校の防止に努めるとともに、不登校児童、家庭への対応を充実させ、不登校児童の再登校を図る。
- ・不登校児童の保護者との面接、連絡を定期的の実施し、共通の目標のもと、協力して対応した。不登校児童の登校回数の増加につなげた。
 - ・スクールカウンセラーやけやき教室などとの連携を図り、登校意欲の向上につなげた。
 - ・保健室、ＳＣルーム、小会議室など不登校児童の居場所をつくり登校を促した。また、タブレット端末を活用し、学級担任と不登校児童がかかわり合う場をつくった。
- ⑤ 特別支援教育等、個別に配慮を必要とする児童への指導を充実させる。
- ・保護者の合意の基「学校生活支援シート」を1学期中に作成し、保護者と連携した計画的な指導を実施した。
 - ・個別に配慮が必要な児童へは、学校支援員の個別指導、巡回指導、スクールカウンセラー、特別支援教室等の階層的な支援を実施した。
 - ・保護者や関係機関（巡回相談チーム、民生児童委員、府中市子ども家庭支援センター、児童相談所、スクールソーシャルワーカー）との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努め、児童虐待を予防した。
- ⑥ 基本的な生活習慣を定着させるとともに、他者への優しさ、思いやりを育成する。
- ・本校の合言葉である3つの「あ」（あいさつ、あんぜん、あとしまつ）を指導し、規範意識の向上と自他を尊重する心を育成した。
 - ・学期に1回、生活月目標にあいさつを掲げ、重点的にあいさつ指導を行った。また、運

営委代表委員が中心となってあいさつ運動を実施し、全校への働きかけを行い、あいさつを通して豊かな人間関係づくりを行った。保護者アンケートでは、「学校は挨拶や社会のルールを適切に指導している。」についてのアンケート結果、肯定的評価は88%であり、昨年度よりも2ポイント上昇した。

- ・感染症予防のため、直接的な副籍交流活動は制限があったが、いくつかの学習や行事などで特別支援学校児童と交流を行った。
- ・感染症予防のため、全校児童が交流することに制限があったが、もち方を工夫し、校庭での活動や小グループでのたてわり活動を行い、異学年が集う機会をつくった。その中で、児童間の年齢を超えた、豊かな関わりの中で思いやりの心を育んだ。
- ・制限のある中で時期や内容、もち方を工夫して農園活動や見学活動を中心とした体験活動を実施した。それらの活動を通して、社会性を身に付けるとともに、自然への感謝や畏怖の心、働くことの意味や社会貢献の大切さを育んだ。
- ・人間関係を良好に保つために全学年で発達段階に応じて言葉の使い方について指導した。特に、低学年を中心に、ふわふわ言葉とちくちく言葉を理解させ、言葉には影響力があることを指導した。

⑦ 体力の向上を図る。

- ・新型コロナウイルス感染予防のため、6年生連合陸上記録会、体育朝会、全校縄跳び週間、全校持久走週間は実施できなかった。しかし、時期を考慮して学年や学級単位での取組は実施し、体力の維持向上に努めた。
- ・体育授業では、感染症対策を施したうえで、授業改善に取り組み、運動量を確保し、意図的・計画的に体力向上を図った。水泳指導は1学級や2学級単位で実施するなど、感染予防と学習の充実の両立を図るために工夫して実施した。
- ・オリンピック・パラリンピック教育を推進し、外部講師を招いての講話の学習やオリンピック競技体験を行った。

⑧ コミュニティスクールの推進

- ・地域と連携した体験学習である「ふるさと学習」を、1学年1取組で実践した。「ふるさと学習」の取り組みにより、地域について児童が深く学び、地域の一員としての自覚、地域を愛する心情を育てた。
- ・地域連携コーディネーターが中心となり、本宿小サポーターズクラブやJA関係者、地域協力者等の協力を得て、水田・農園活動を推進した。
- ・新型コロナウイルス感染症予防の取り組みや、日々の学習の成果、特徴的な教育活動の紹介などを学校便りやホームページで発信した。
- ・図書やヤギボランティアの方々など、教育支援ボランティアの力を教育活動に生かした。
- ・地域と連携した防災訓練を実施することができなかったが、防災に関わる話し合いを行った。

⑨ 小中連携の推進

- ・新型コロナウイルス感染症予防のため、小中連携の活動は制限され、1回のみオンラインによる開催になった。小中連携コーディネーターが計画的に準備を進め、分科会単位で3校が話し合いを活発に進め、各校の実践について協議を行い、交流を深めることができた。

- ・中学校の音楽担当教員が6年生に合唱の出張授業を行い、専門性の高い指導を受けることができた。また、中学校進学に向けて、小中学校の教員が交流し情報交換を実施した。

(2) 重点目標への取り組みと自己評価

① 学校が楽しいといえる児童が90%以上

児童のアンケートでは、94%（昨年度比1.0%↑）で、目標を達成した。児童が「学校が楽しい」といえるためには、安心して学べる学級・学年である、仲の良い友達がいる信頼できる教師がいるなどがあげられる。また、分かる授業も大切である。

そのために、今年度も感染症対策を取りながら、できることをできる形で実施する中で児童理解を深め、児童一人一人が充実した学校生活を送ることができるようにした。また、学年内で交換授業も実施し、児童を複数の教員で見守る関係づくりを行った。

来年度は、児童観察や家庭との綿密な連携を行い、児童一人一人の困り感に素早く気づき、問題の未然防止と早期発見・解決に向けて取り組んでいく。また、全教員の授業力向上に努め、「分かる授業。楽しい授業」を目指し授業の充実を図る。

② 漢字・計算の定着率90%以上

2学期末の学習状況調査では、漢字の定着率が1・2・3年で90%（昨年度同数値）、4・5・6年で85%（前年度比1%↑）であった。計算の定着率が、1・2・3年で92%（前年比1%↓）、4・5・6年で84%（前年度比4%↓）であった。1・2・3年生は目標を達成することができたが、4・5・6年生は90%には届かず、今年度の目標には至らなかった。

来年度は、朝の基礎基本タイムを計画的かつ有効に活用し、反復学習に力を入れて習熟を図り、基礎基本の確実な定着を図る。また、算数科においては、TT指導（1・2年）少人数指導（4・5・6年）により、個の課題に応じた指導を行い、学び残しのないように、児童一人一人の学力の定着と向上を目指す。また、家庭学習の意義を改めて児童と保護者に伝え、家庭と連携して学力の定着を図る。

③ 家庭で学習する習慣（学年×10分）が身に付いている児童80%以上

保護者アンケートでは78%（昨年度比3%↓）であったが、児童アンケートでは68%（昨年度比4%↓）で、目標大きく下回った。

昨年度作成した「家庭学習スタンダード」について、児童への指導の徹底と保護者への周知や働きかけが十分ではなかったことが低下の原因と考える。来年度は、年度当初に各学年学級で家庭学習の大切さについて指導の徹底を図るとともに、年度当初の保護者会で「学習スタンダード」について保護者に周知して、保護者と連携を深め、児童が主体的に、家庭での学習に取り組み、学校での学習を復習し確実に自分の力にするように指導する。

④ 友達に優しくしようと心がけている児童90%以上

児童アンケートでは97%（昨年度比1%↓）で、目標を達成できた。

今年度も教育目標「豊かな心をもち仲良く助け合う子ども」を受け、学級で、学年で、異学年交流の場で、優しい言動や思いやりのある言動を褒め、強化してきた。「あいさつ」「ありがとう」の言葉を大切にして温かい人間関係づくりに取り組んできた。

来年度も、優しい言動や思いやりのある言動を褒めるとともに、互いに協力したり感

謝の気持ちをもったり伝えたりできる活動を充実させていく。また、保護者やチッキの方がなど、日常的にお世話になっている方々への感謝の気持ちをもち伝える機会の充実を図っていく。

⑤ すすんであいさつする児童 90%

保護者アンケートでは88%（前年度比2%↑）で、児童アンケートでは83%（昨年比1%↓）で、目標を下回った。

今年度は、運営代表委員会が中心となり毎学期に1回「あいさつ運動」を実施するなどあいさつを全校に働きかけた。その時は盛り上がり一時的に挨拶が活発になったが、十分に定着を図ることができなかった。

来年度は、「いつでも・どこでも・誰とでも・自分からあいさつ」を目標にして、あいさつの日常化の徹底を図る。また、保護者や地域にも協力を依頼し、地域ぐるみであいさつ運動を展開し、あいさつの習慣化・日常化を徹底する。あいさつを通して豊かな人間関係づくりや防犯にもつなげたい。

⑥ 外で元気に遊ぶ児童 90%

児童アンケートでは69%（前年比3%↓）で、目標を大きく下回った。特に6年生の数値が低い。今年度も体力向上委員会が中心になる運動の日常化に向けた取組ができなかったり、高学年が中休みに委員会活動等があったりして、外遊びができない状況でもあった。

外遊びを通して望ましい友達関係を築くことは重要である。また、心や体の健康の向上にもつながり、体を思いきり動かした後は学習への意識も高まる。

⑦ 学校のきまりを守って生活する児童 90%

児童アンケートでは94%（前年比4%↑）で、目標を達成できた。児童が学校に決まりを守って生活しようとする意識が定着している。来年度も児童の規範意識を育み、極まりを主体的に守る児童の育成に努めたい。

ただ、今年度、放課後の遊び方などの課題がしばしば見られた。家庭とも連携し、繰り返し指導していく。

⑧ 自分の安全を自分で守ろうと心がけている児童 90%

保護者アンケートでは94%（昨年度比2%↑）、児童アンケートでも95%（前年比2%↑）で、今年度も目標を達成できた。

今年度も感染症予防のため、地域と連携した防災訓練は実施できなかったが、交通安全教室や、毎月の避難訓練、セーフティ教室は時期や内容を工夫して実施した。各訓練への参加態度は大変よく、安全への意識の定着を感じさせる。

しかし、昨年同様、廊下や階段の歩行には課題が見られ、日常生活の中での安全への児童の意識向上が課題である。教職員が一丸となり、日常の指導を粘り強く、繰り返し行い、児童の安全への意識をさらに高めていく。

3 次年度以降の課題と対応策

(1) 児童の学力を図る。

① GIGAスクール構想によるタブレット端末などICTを活用した授業の充実、「ふるさと学習」の充実、プログラミング教育の充実を図る。そのために、学習支援員、I

ＣＴ支援員、地域コーディネーター等の人材を有効に活用する。また、ＩＣＴの活用については、学校内外で研修の機会を多くもち、教員のスキル向上を行う。

- ② 問題解決学習に充実に向けて、各教科で学習問題の精査を行う。また、学年内で交換授業を行い、教材開発や指導法の改善につなげる
- ③ ねらいを明確にした授業、友達との交流により児童同士が高め合う授業等、本校で実践してきた「学び合いのある授業」、本宿スタイルの徹底を図り実践していく。
- ④ 個別最適化の指導を行い、児童一人一人の学びを保障する。そのために課題の提示や指導方法など、個に応じた指導の工夫を行い、学び残しのないように、漢字力や計算力など基礎基本の定着、徹底を図る。
- ⑤ 学習規律（授業規律、持ち物、ノート指導等）の定着を一層進める。
- ⑥ 学年で連携した家庭学習を実施するとともに、家庭と連携し児童の実態に応じた家庭学習の取り組みをさらに強化する。

(2) 教師の資質向上を図る。

- ① 校内研究で「ＩＣＴを活用した問題解決学習」に取り組み、各教科でＩＣＴを活用した学習の深まりを実現する。授業を公開し合い、互いを高め合う。また、ＥＳＤの視点に立ち、持続可能な社会を目指す中で、地域に愛情をもつ児童の育成への指導力の向上を図る
- ② 授業中のノート指導や板書等のショート研修に取り組み、教師の指導力の向上を図る。
- ③ 自己申告を活用し、各自の授業改善の目標、方法を指導する。管理職による日常的な授業観察を実施し、授業力の向上につなげる。
- ④ 主任教諭を核とした組織的なＯＪＴを計画的に実施し、若手教員の育成を行う。
- ⑤ ３回のサービス事故防止研修、職員会議や職員夕会を活用したミニ研修を行い、サービス事故防止への教員の意識を向上させる。サービス事故ゼロを目指す。

(3) いじめの未然防止、早期解決を図るとともに、安全性を高める。

- ① 児童の実態把握に努め、いじめ防止対策委員会などによる組織的な対応、スクールカウンセラーの活用、保護者との連携などにより、いじめの未然防止、早期解決に努める。
- ② 人権教育プログラムを活用して、人権尊重教育に計画的に取り組み、人権感覚を身に付けさせる。
- ③ 児童情報の共有、ロールプレイ研修を実施し食物アレルギー事発生防止に努める。

(4) 不登校の防止に努めるとともに、不登校児童、家庭への対応を充実させ、不登校児童を再登校に導く。

- ① 教師による日常的な児童観察、児童観察やスクールカウンセラーによる相談、家庭との綿密な連携を強化し、児童の心情を理解するように努め、問題の未然防止と早期発見・解決に向けて取り組んでいく。
- ② 不登校児童の保護者との面接、連絡を定期的に行い、共通の目標のもと、協力して対応する。

(5) 特別支援教育等、個別に配慮を必要とする児童への指導を充実させる。

- ① 個別に配慮が必要な児童へは、学校支援員の個別指導、巡回指導、スクールカウンセラー、特別支援教室等の階層的な支援を実施する。
- ② 保護者や関係機関（巡回相談チーム、民生児童委員、府中市子供支援センター、児童

相談所、スクールソーシャルワーカー)との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努め、児童が安心して生活できる環境づくりを支援する。

(6) 基本的な生活習慣を定着させるとともに、他者への優しさ、思いやりを育成する。

- ① 学期に1回、生活月目標にあいさつを掲げたり、挨拶指導重点週間を設けたり、あいさつ運動を実施したりして、重点的にあいさつ指導を行う。保護者や地域にも働きかけ、地域ぐるみであいさつの推進を図る。
- ② 「ふるさと学習」、農園活動、見学活動を中心とした体験活動を通して、社会性を身に付けるとともに、自然への感謝や畏怖の心、働くことの意味や社会貢献の大切さを育む。

(7) コミュニティスクールの推進

- ① 地域と連携した体験学習である「ふるさと学習」の取り組みを充実させ、地域について児童が深く学び、地域の一員としての自覚、地域を愛する心情を育てる。
- ② 地域人材、地域の施設や環境などを学習に積極的に活用し、地域とともに子供を育てる教育の推進を図る。

(8) 小中連携の推進

- ① ICT機器を活用してオンラインにより小中の教員交流を実施した。教育課題ごとに分科会を組織し、分科会ごとの 課題研究、研究協議を実施した。今後、ICTの活用や特別支援教育などについても研究を深める。
- ② 中学教員の出張授業や小中教員の実技研修など、教員間の連携も深める。

(9) 感染症拡大予防に対応した学習活動、学校行事を工夫するとともに、児童の健康安全を図る。

- ① 日常的な学習活動や運動会、展覧会、宿泊学習、校外学習を実施するにあたっては、感染症拡大予防策を講じた実施時期、実施方法や内容を工夫する。
- ② 手指消毒、うがい、マスクの着用、身体的距離の確保等の、感染症拡大予防のための行動を指導する。
- ③ 感染症拡大予防のための、登校時の見守り、健康観察、授業形態の確認、消毒用消耗品の配布・補充等の対応を、組織的に行う。